



道南エリアの「道の駅」の 新たな魅力づくりに向けて どうなん「道の駅」サミット

国土交通省北海道開発局
函館開発建設部道路計画課

北海道開発局函館開発建設部では、ドライブ観光ニーズの多様化や外国人観光客の増加、防災拠点としての期待が高まるなど、「道の駅」に求められる機能に変化している中、改めて渡島、檜山地域の「道の駅」の新たな魅力づくりを推進することを目指し、第1回どうなん「道の駅」サミットとして、現在道の駅のある自治体だけでなく、これから道の駅登録を検討している自治体や、観光や交通に携わる事業者を交えた意見交換会を5月14日、函館市で実施しました。以下は、どうなん「道の駅」サミットの概要です。

開催あいさつ



高橋 敏彦
北海道開発局函館開発
建設部長

函館開発建設部では、北海道新幹線開業まで3年を切る中、平成5年にスタートし、現在1,000駅を超えるまでになった「道の駅」に注目し、経済波及効果を広げていく手がかかりになると考え、昨年度の検討会（ワーキンググループ）を経て、今回、第1回どうなん「道の駅」サミットと題して、現在道の駅のある自治体だけでなく、これから道の駅登録を検討している自治体や、観光や交通に携わる事業者を交えた意見交換会を実施させていただくことになりました。

「道の駅」には三つの「うれしい」があると思います。地域の代表であること、安心感、サインの三つです。道の駅にはブランド力があります。ただし、道南の道の駅には素晴らしい駅も数多くある一方で、ちょっと寂しいなと感じる駅もあります。これらの道の駅を皆様と一緒に盛り上げていきたいと考えています。



どうなん「道の駅」サミット開催の主旨

道南の「道の駅」は、直轄国道延長100km当たりの設置数で見ると、東北地方の3.0駅と比べて、1.8駅と低い水準です。交通量が同規模の他の「道の駅」と比較しても、入込数は平均より低い水準となっています。

入込数が多いところは駐車場面積やレストラン面積も大きいという傾向があるのですが、道南の「道の駅」は全体規模や物販面積で比較すると全道平均の約3分の1しかありません。

道南では新幹線開業後、自家用車・レンタカーを利用した道南観光のニーズが増大すると予想されることから、「道の駅」の見直しが必要な時期にきているのではないのでしょうか。

また「道の駅」は災害時の防災拠点としても活躍可能な施設で、管内3駅で簡易トイレなどの備蓄が整備されているなど、新しい展開も生まれてきています。



阿部 剛
北海道開発局函館開発建設部道路計画課長

講話

じゃらんの記者アンケートなどから見えるもの

北海道の人が道内の旅行に出かける目的の1位は温泉ですが、「地元のおいしいものを食べる」が2位と近年急激に伸びており、温泉を抜いて1位になるのではというところまで来ています。

じゃらんでは、読者アンケートを基に、道内「道の駅」の満足度調査を実施しています。「道の駅」の満足度は、食事メニュー、テイクアウトメニュー、地域特産品などのお土産で高得点をとった「道の駅」が上位になっています。清潔なトイレや休憩スペースなどは、あって当たり前の最低限のサービスと思った方がよく、ランキング上位にはつながっていません。



原田 亜紀 氏
(株)リクルートじゃらん事業
統括室地域振興課地域振興統括プロデューサー

海の幸が豊富な「うとろ・シリエトク」、絵本と農業の町を推進している「絵本の里けんぶち」、リニューアルして温泉のコンテンツが充実している「摩周温泉」などの人気が高くなっています。

マチの顔として特徴がわかりやすく伝わっていること、ご当地の特産品や限定品を扱っていること、こまめな情報発信をしていること、この三点がそろっているところは満足度の上位に食い込んできています。

今は「一人十色」の時代といわれ、誰と行くのかでも行動パターンが変わってくるので、一人一人の背景にあるどれだけのシーンで接点を持っていけるかを考えるとよいでしょう。

ご当地の特産品や限定品は、食材だけでなく、地元作家の工芸品なども良いですね。食事の満足度は、例えば「ジャガイモには北海道厚沢部産のメイクイン使用」など、細かな情報発信が有効です。

最近、道内では「赤ちゃんのほっとステーション」という取り組みが進められ、全道184か所で展開しています。若いお母さんたちが出かけやすくすること、またそこにおばあちゃんなどがセットになっていくと、消費単価が高くなったり、宿泊の単価が高くなっていくと思います。

「道の駅」のライバルは、高速道路のサービスエリアやパーキングエリアなのかも知れません。地元の牧場の牛乳を使ったアイスクリーム、ペット連れに対応したトイレ、絶景ポイントに用意した休憩所、ミニガーデンなど、休憩場所として心地よい場所になってきています。

道内人気観光地調査の最新版では、ランキング1位に函館、2位に湯の川温泉がランクインしているほか、16位に江差・上ノ国・松前がランクインしていて、人が来る可能性が非常に高い場所であることも注目してよいと思います。

「道の駅」に求められるニーズも変わってきている

「道の駅」スタンプラリーは、途中から有料で配布していますが、有料でも5万部売れていて、去年は7,596人が応募、うち完全制覇は2,641人といまだに根強い人気があります。今は駅数も増えているので、完全制覇をするには2年かけてもいいよということにしています。



和泉 晶裕
北海道開発局建設部
道路計画課長

「道の駅」制度は、高速道路系の「流れ」機能の整備が進むにつれ、あわせて現道での「溜まり空間」の整備が求められ創設されたものです。北海道では、平成3年頃に新聞の投書等で国道脇にぜひトイレを作りたいという声もあったことから、「道の駅」制度はタイミングがよかったと思います。

第一世代の「道の駅」は、既存施設の利用が多かったのですが、第二世代くらいになると、グルメや地域の物産、施設そのものにも工夫するところが増えてきて、平成10年代の中頃に利用者数が激増しました。

道東の既存施設活用型の「道の駅」の例では、トイレの管理にお金もかかるし、入り込みも悪いので「道の駅」から脱退したいといわれるほどでしたが、今はレストランメニューの工夫もあり、人気の「道の駅」となっています。施設の豪華さではなく、地域の特徴ある「工夫」「サービス」が大切です。

お客さんが求めているニーズも変わってきて、物産やグルメも「道の駅」の当たり前の品質となってきましたが、小さな「道の駅」でも小さな工夫でお客さんは評価してくれます。逆に工夫のない、「当たり前品質」を満足しないところの評判が落ちていきます。

道路施策としても、シーニックバイウェイと「道の駅」の連携により、地域ごとのスタンプラリー開催など、訪れた方に立ち寄ってもらえるような取り組みもしています。北海道新聞とコラボした『北海道の100の道』という冊子では、シーニックルートの中にある「道の駅」を紹介していただいています。

「くろまつない」は、地域の特産と「道の駅」の商品について、レジ担当の若い職員がきちんと答えられるところが素晴らしく、スタッフの教育も非常に重要と感じています。

2015年の新幹線開業に向けて、それぞれの「道の駅」が地域情報の発信を工夫するなどの取り組みを進めると同時に、道南の「道の駅」同士の連携や、旅行会社やメディアなどの民間企業とのタイアップにより、積極的なPRを図っていくことができたらいいいですね。

長万部町 町内の国道沿いに「道の駅」を作りたいと考えているのですが、なかなか場所がありません。以前にはトイレや駐車場は北海道開発局で作っていただけたのですが、今はどうなのでしょう。

また、長万部町の道路区間では交通事故が多くなっています。長万部から函館までの間の幹線道路に「道の駅」は森町だけです。休憩する場所があれば、事故も減るのではないのでしょうか。

和泉 近隣のトイレや駐車場からの距離などの条件から一体型の整備のハードルは高くなっています。ただし、長万部から八雲間の事故率はとても高いのは事実で、地元の方々と相談していきたいと考えています。

意見交換

奥平 道南圏ではこれから交通体系が大きく変わってくる時期を迎えています。その中で、「道の駅」の活性化は観光振興に大きなインパクトをもたらすことでしょう。活発な意見交換を通じて、活性化につなげていけたらと思います。

八雲町 今年、噴火湾パノラマパーク道立公園に、観光物産交流館を増設し、観光情報や町内商品の販売などを展開する予定となっています。「道の駅」への登録は考えていません。

木古内町 新幹線駅の利用客を視野においた「道の駅」を計画しています。木古内駅を利用する、渡島西部の



コーディネーター
奥平 理氏
函館工業高等専門学校
准教授

4町（木古内町、知内町、福島町、松前町）、檜山南部の5町（上ノ国町、江差町、厚沢部町、乙部町、奥尻町）との交流観光の中で作っていききたい。

トイレは最優先に考えています。女性のトイレはどここの「道の駅」に行っても混んでいます。女性のトイレを増やし、また椅子に座ってお化粧ができるスペースを設けたいと考えています。

駐車場は観光バスが出入りしやすく、レストランは美味しいものを安く提供したい。また、今回の話を聞いて、赤ちゃんについても配慮し、実施設計に組み込めるといいなと思います。

江差・上ノ国・松前地区がじゃらんの「もう一度行きたい」の6位に入っていることは非常に心強く、連携もより強固にしていけると思います。

現在、総務省の補助を受け、地域おこし協力隊を2名採用しています。3年間の教育をして、渡島・檜山の観光に精通した人材に育成し、そのまま「道の駅」で雇用を図りたいと考えています。

鹿部町 今まで観光資源は間欠泉公園しかないと思っていましたが、海と温泉をキーワードに取り組んでいきたいと考えています。漁業は盛んですが、温泉にはあまりこだわっていなかったため、間欠泉周辺整備で少しこだわっていききたい。

物産館整備の構想がありますが、鹿部バイパスも完成して、物産館をどこに置くかをまだ悩んでいるところです。「道の駅」に登録するかどうかにもそれによって変わってくると思います。

上ノ国町 「上の国もんじゅ」では元々図書館だったスペースで物産を販売したところ、お客さんは増えました。レストランでは「てっくい丼^{※1}」やいちごジュースなどのテイクアウトを含めて目玉商品的なものもやっていて、評判が良い状態です。満足度を高めるためには、これまでの考えを改め、旅行者に少しでも長く滞在してもらえそうな、回転率を下げる工夫が必要と感じました。

「道の駅」が一番の観光資源と考えているので、もっ

ともっと力を入れていきたいです。

厚沢部町 「あっさぶ」は函館から江差までの国道227号沿いにある「道の駅」として、トイレタイムに立ち寄る方は非常に多いです。

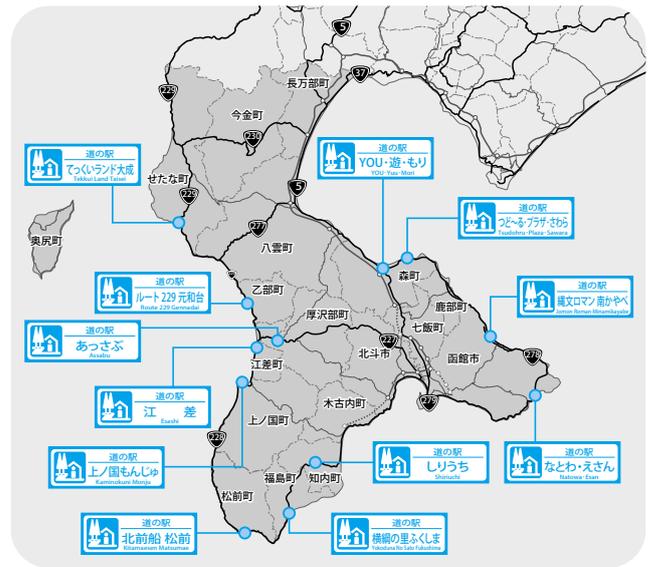
現在、8千万円をかけて改修をしている最中ですが、コーヒーや軽食など、今では必要なサービスと考えていますので、改修にあたってはレストラン部門を取り入れることにしています。

「道の駅」を囲むスギやヒバなどの自然環境が好評で、こうした環境を保護し、太鼓山や町内にある4カ所の温泉施設なども、観光資源として有効に活用していきたいと考えています。

松前町 「北前船松前」は駐車場が狭く、さくらまつりの時期は大型車両が入ってくるので、さばききれない状況です。松前さくら漁協が指定管理者となって運営しており、物販の販売、特に漁協の直販に力を入れています。

軽食関係は松前のりを使った「のりだんだん^{※2}」に力を入れています。飲食は地元のNPOにテナント入居していただいています。「マグロの三色丼」が有名となりましたが、ほかにもいろいろなメニューを工夫していきたいと考えています。

また今後、広域的な「道の駅」の連携に取り組んでいきたいと考えています。



※1 てっくい丼
檜山地域ではヒラメのことを「てっくい」と呼ぶ。てっくい丼は、その高級魚のヒラメを天ぷらにして丼にしたもの。

※2 のりだんだん
「松前のり」を使用した2段重ねののり弁当。

江差町 「江差」は駐車場のスペースもあまりなく、「道の駅」そのものの作りも小さくて、町の顔になっていないなという思いがあります。

トイレはウリではないと言っても、やはり観光客や人を導くにはトイレというのは不可欠だと思います。北斗市から江差の間、江差から松前の間で、バスに乗ってトイレに行ける場所が作られることを願います。

函館市 「道の駅」というのは、町々の観光物産的な役割を果たさなければ、継続的に客を呼び込むのは難しいと思います。「道の駅」の楽しみはグルメ、物産だと思いますので、それをきちっとした形で提供できるかというのが重要だと思います。

引きつけるには物産、店構え、陳列の方法などセンスのあるものを工夫するとよいと思います。一度、12の「道の駅」全部を専門家に、どのような点を改良すればよいのか診断してもらった方がよいと思います。

函館の場合、「なとわ・えさん」などでは地域の「バキバキホッケ^{※3}」を使っています。特徴のあるものをどれだけ用意できるか。漁師や農家が食べているものを、大きなイベントではなく、土日や連休、夏休みの期間中だけでも「道の駅」で若い人の力で提供していただけると人気が増すのではないのでしょうか。

道南を回ってもらうため、12の「道の駅」をつなぐということが必要です。「道の駅」の位置はもちろん、町の観光情報、物産の情報、グルメの情報、さまざまなものをつなぎ、12の「道の駅」がまとまって発信していったらどうでしょうか。道南をぐるっと回りたいと思うときのコースづくりなど、マップも大事になってきます。

連携して道南の「道の駅」をやるように頑張って、全体として回ってもらう仕組みをつくる。車なので1カ所に行くわけではないので、周遊できるようなものにしていければよいと思います。

北海道新聞函館支社 率直に言うと、ハード整備は財政状況を見ると自治体にとってリスクが高すぎると思います。

成功例として、函館市南茅部の白尻漁港で漁師の方が土曜日にやっている市場、JA新はこだてが北斗市につくった「あぐりへい屋」というファーマーズマーケット（農産物直売所）にもたくさんの人が行っています。そういう本物のものさえあれば、全力で応援したいと思います。

お金をかけなくても、夏の間だけ、週末だけでも、3週間くらい、産直市をやったらよいと思います。上ノ国町、江差町、乙部町などで、土日市などを7～8月の子供の夏休み期間中だけでもやっていただければ、よいものがあれば紙面で紹介し、ヒトの流れをつくることに貢献できるのではないかと思います。

NHK函館放送局 NHK総合で月曜日から金曜日の昼に放送している「つながる@きたカフェ」で、道内の「道の駅」を紹介しています。「道の駅」について、道民の関心は高いと感じています。

台湾の観光客からは「日本はトイレが奇麗、清潔で皆ウォッシュレットが付いている」という話を聞いています。気持ちよく旅をして、満足して帰っています。トイレは文化のバロメーターといわれますが、「道の駅」は日本の文化の一つといってもよいかも知れません。

「道の駅」も一つの文化だと思い、そういう文化を背負っているという意識をもっていけば、観光施設は国際交流の拠点のようになっていく可能性がありますね。

津軽海峡フェリー わが社は新造船を導入した大間航路と青森航路を持っています。フェリーターミナルは、「道の駅」に優るとも劣らない機能を持っています。今は道南の「道の駅」の議論ですが、津軽海峡圏全体に波及効果が及ぶといいと思います。さらに大きな交流、発展を期待します。

函館バス 「松前さくらまつり」では、「道の駅」をシャトルバスの発着場としています。

定期観光バス「道南史蹟めぐり」では、「上ノ国もんじゅ」で昼食をとっています。「てっくい丼」など、非常に工夫・努力を感じているところです。

※3 バキバキホッケ

えさん漁業協同組合は独自の処理方法により鮮度落ちの早い大衆魚のホッケの長時間の鮮度保持を実現、全国へ流通させた。網を張る時間を従来の13時間から2時間に大幅短縮、網からあげたばかりの活きのよいホッケを船上または港で直ちに水氷に漬けて締め、鮮度のよい状態を長時間保つ。「バキバキ」は水氷で締めたホッケがピンと硬く反り返っている様から名付けられた。

あまり知られていませんが、路線バスでも「あっさぶ」でトイレタイムをとっているなど、関わりはあります。特に高齢者にとって、長距離の移動ではトイレの心配があるのです。国道227号にはトイレが少なく、峠付近の北斗市側にトイレを要望したいと思います。

全日本空輸函館支店 函館市さんのご提案のとおり、各道の駅の情報バラバラではなく1カ所にまとまっていると、全日空の媒体を使っていろいろと情報発信することが可能になると思います。道南の「道の駅」は土地の名前だけで特徴がわかりにくいところもありますが、一目でわかるようなキャッチコピーがあれば、普通のお客さんにもわかりやすいと思います。

日本航空函館支店 函館空港は東京から来る客は多いのですが、戻る客が少ないのが実態です。札幌へ移動し、千歳空港から帰っていると思われます。

同じような間隔で「道の駅」がなく、森町の「YOU・遊・もり」の次は黒松内町「くろまつない」まで「道の駅」がないというのも難点です。

観光地として九州・沖縄に負けているのは、笑顔が少ないことです。言葉が違うので、特に関西人に受け取り方では「この人何しに来た？」みたいな冷たい態度に見えるらしく、イヤな感じを持たれたまま帰ってしまうということがあります。お客さまの視点で、サービスや教育をプラスすべきです。「あっさぶ」であれば「メイクインが1番です」とか、「YOU・遊・もり」であれば「2階から駒ヶ岳が見えます」とか、一言加えることが大事でしょう。

北洋銀行 「道の駅」の取り組みの話を知っていると、特に食関係の企業の悩みと共通していると感じました。どうやったら売れるのかということは、単に出会いの場を設けるだけではなかなか次のステップに進んでいけないため、それぞれの専門家のお知恵を拝借していくことが大事だと思います。

また、銀行のスペースを皆さまのPRの場に使っていただければありがたいと思います。

檜山振興局 「道の駅」の内容を充実させるのと、観光地の磨き上げをしてお客さまを迎え入れる体制づくりが必要です。

例えば、ホスピタリティの向上を図る。また、管内には「日本一」、「北海道一」が40ぐらいありますから、情報発信の中でふるさと自慢をしながら、内容の充実を図っていけば、通行量の増加にもつながるものと思っています。

渡島総合振興局 渡島と檜山両管内では、今、平成23年頃から新幹線の開業に向けて、食と観光の磨き上げと発信のため、いろいろな事業に取り組んでいます。地域ごとにエリアを設定して、人を育てる、グルメを育てる、そしていろいろな情報発信をしていこうということをやっています。

「道の駅」はそういうことができる場所という意味で、これからも面白い切り口かなと思っています。

今後のスケジュール

事務局 今回のサミット議論を踏まえ、今後、事務レベルの検討を並行して進め、具体的な行動に向けて、ブラッシュアップ^{※4}していきたいと考えています。



立花 謙二 氏
北海道檜山振興局長



中西 猛 氏
北海道渡島振興局長

※4 ブラッシュアップ (brushup)

磨き上げること。一定のレベルに達した状態からさらに磨きをかけること。